

京都大学東南アジア地域研究研究所が公開する
Linked Archive of Asian Postcards
(<http://asian-postcards.mydatabase.jp/>)

旅のおわりに——描かれた近代都市・建築をめぐる

貴志俊彦

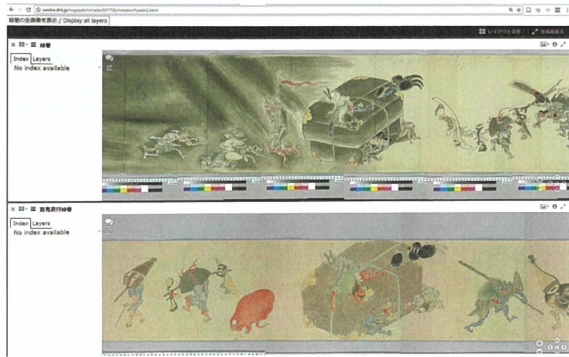
本書は、画像研究、都市・建築研究、観光研究、文学研究を接合する意欲的な試みである。各論考は、戦前の絵葉書や写真が中国や台湾、シベリアや朝鮮半島、南洋への関心を高め、異国の旅への恋慕、海外への移住や資本投資への夢をいざなう役割をもはたす社会的記号であったことを示唆している。

いうまでもなく、近年の画像研究の進展は目覚しく、絵葉書や古写真などのメディアも文化資源であるという認識は研究者にも共有されつつある。この種の非文字メディアが描くイメージは、建築や都市、景観との親和性が高まり高い。土木学会は、早くからこうした点に注目して独自のデジタルアーカイブを公開している¹⁾、本書の執筆陣も学習院大学の所蔵資料を渉猟して、その点を検証している。筆者が近年の画像研究の展望に期待するのは、ウェブ上でも画像の国際的な共有が可能になったことがある。写真の共有を目的として Yahoo! が運営する Flickr はよく知られているが、京都大学東南アジア地域研究研究所グローバル情報ネットワークも、米国防立大学エト大学のポール・バークレイ教授とともに、それぞれの絵葉書データベースを国際的に連携させる「Linked Archive of Asian Postcards」の構築を進めている(上図参照)。

ところが、画像へのアクセスを標準化し、画像の相互運用を容易にするトリプルアイエフ(International Image

Interoperability Framework (IIIF)) が登場すると、世界の著名な大学図書館や大英図書館、バチカンの図書館もが、この方式を採用することに踏み切った(次頁の左上図参照)²⁾。トリプルアイエフは、世界各地に孤立し、散逸した画像資料を容易に連携できる画期的なフレームワークなのである。国際的な画像資料の共有によって、日本では絵葉書研究が「帝国」圏にとどまっていた段階から、世界各地で作成された画像資料との国際比較に着手する条件が整った。こうなると、絵葉書に描かれたイメージは、利用者の主観的解釈ではなく、数量的な分析をもとに検証ができるようになるだろう。

さらに、画像資料の可視化の方法も多様になりつつある。AI 技術を用いて白黒画像を自動で色彩化できる技術も開発が進められ³⁾、またこれを SNS や Google Earth と組み合わせ、人びとの失いつつある記憶の呼び起こしにチャレンジする試みも進められている⁴⁾。いま一つの斬新な可視化の手法は、第二次世界大戦の写真と現在のそれを重ね合わせる「The Ghosts of World War II」⁵⁾、鎌倉の「今」と「昔」の写真の容易に切り替えることができるアプリ「鎌倉今昔写真」⁶⁾、そしてフォトグラメトリーを用いて都市景観を 3D 化して再現しようとするプロジェクト「1964 TOKYO VR」⁷⁾ などがあるが、共通しているのは過去と現在の往来を容易にするという手法である。こうした画像の可視化の



III Fのビューワーで作成された百鬼夜行絵巻(作成:永崎研宣)

試みは、イメージが特定の意味内容に固定されるものではなく、時代の記憶や使用場所、思念によって変異することを示唆している。

ただ、今さら言うまでもなく、コンピュータ技術による画像分析や可視化だけで、そこに描かれた対象物の意味や意義を明らかにできるわけではない。画像研究は、文字資料や証言、フィールド調査などがあってはじめて成立するのである。都市や建築を語る場合は、設計や建築に携わった各企業の設計図・施工図、資料に関する記録、行政機関の都市計画・整備に関する文書、当該地で発行された新聞、関係者が発行した雑誌、さらにはそれぞれの都市を訪れた人びとの日記、文学、旅行記、手紙などが、検証のための重要な素材であり続けている。デジタル技術の有用性が認識される前にも、すでに藤森照信グループが中国の研究者とともに、『中国近代建築総覧』全一三巻、一九八九年(中国近代建築史研究会・日本アジア近代建築史研究会)、一九九二―九六年(中国建筑工业出版社)などを発表し、各種文書や非文字メディア、悉皆調査に基づき、都市や建築の意味を明らかにしつつあった。⁸⁾

むしろ、本書には少なからず課題もある。取り上げられた都市の住民、そこを訪れた人びとは、日本人だけではなくた都市の側面についての検証が必要であつたらうし、そのためには多言語資料、「帝国」圏以外で発行された非文字メディアの利用が不可欠であった。本書を手がかりとして、画像、都市建築、観光などの研究を進めるにあたっては、デジタルリテラシーの向上に努めるとともに、マルチアーカイブを採用する人文学的な研究手法の習得をぜひ志していただければと思う。

ただ本書が示すように、多様な機能を備える都市や建築

が今日の社会にとっていかなる「遺産」としての意味を持ちうるのかを見出そうとする点は、今後も継承されてよい。「旅」というソフトなアクティビティを前面にしながらも、突き詰めていうと、その背後には簡単に建築を破壊する日本の社会、歴史的意義を看過したままリノベーションを進める中国の文化への現代的批判が秘められているからである。

注

- (1) 「土木図書館デジタルアーカイブス」<http://www.jsce.or.jp/library/archives/index.html>。
- (2) 高野明彦(国立情報学研究所)、北本朝展(人文学オープンデータ共同利用センター)、永崎研宣(一般財団法人人文学報学研究所)らが中心となって、日本におけるトリプルアイエフの開発や啓蒙普及活動を進めている(<http://itrip.jp>)。
- (3) 石川博(早稲田大学)たちのディープネットワークを用いた手法があげられる(<http://rics.waseda.ac.jp/8082/>)。
- (4) 渡邊英徳(首都大学東京)は、資料のフロー、化とコミュニケーションの創発による記憶の継承を試みる手法を「記憶の解凍」と呼んでいる(<https://writer.com/hwtnv>)。
- (5) 「Ghosts of History」(<https://www.facebook.com/thenandnowghosts/history>)。
- (6) 面白法人カヤック「鎌倉今昔写真」(<https://www.kayac.com/service/client/1401>)。
- (7) この試みは、齋藤精一(ライゾマティクス)、土屋敏男(日本テレコム)、永田大輔(DISTANT DRUMS)らが発足をさせた一般社団法人1964 TOKYO VR 24時間進められようを(<https://1964tokyo-vr.org/>)。
- (8) このほか、村松伸「上海―都市と建築一八四二―一九四九年」(PARO)出版局、一九九一年、汪坦・藤森照信監修「全調査東アジア近代の都市と建築」(筑摩書房、一九九六年)のほか、越沢明「満州国の首都計画―東京の現在と未来を問う」(日本経済評論社、一九八八年)、西沢泰彦「海を渡った日本人建築家―二〇世紀前半の中国東北地方における建築活動」(彰国社、一九九六年)なども、いまや不可欠の入門書である。